

CSS (カスケーディング・スタイル・シート) を使った視覚表現

XHTMLのタグや属性を使ったWebページの装飾表現は、生産性やメンテナンス性が極端に落ちたり、デバイスが多様化する現在ではその装飾があることによってアクセシブルでなくなる可能性もあります。そこで、Web標準に準拠してXHTMLには文書としての情報構造を記述し、デザインやレイアウトといった見た目の装飾にかかわる部分はCSSを用いて表現する、ということが最良の選択肢となるのです。ここからは、CSSに関する基礎知識を解説しましょう。

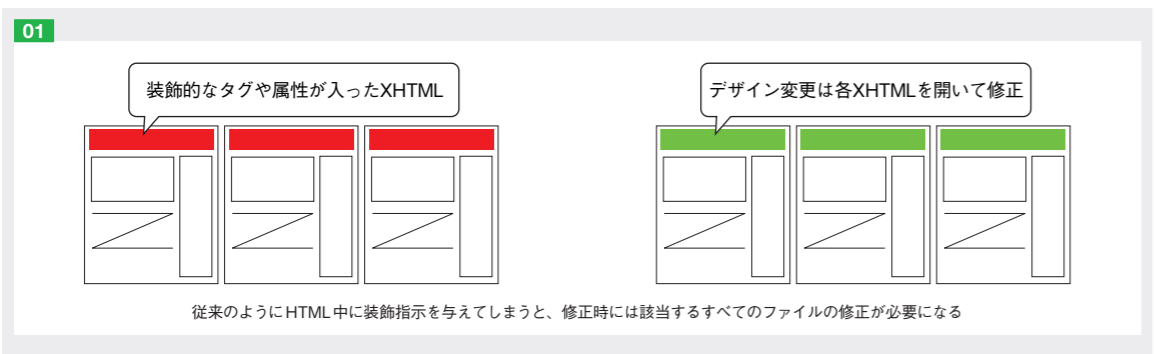
見た目をコントロールするために用意されたCSS

CSS^{*1} (カスケーディング・スタイル・シート) とは、HTML や XHTML でマークアップされた文書に視覚的な表現を与えるために存在しています。Web 標準に準拠し、アクセシビリティの向上や再利用性を確保するためには、XHTML 文書には装飾目的のタグや属性を取り除く必要があります。XHTML 文書に情報構造だけを記述しただけでも十分な価値があるものですが、そのままではブラウザの初期設定値を利用してブラウザ内に表示され、なんだか見た目的に物足りないWebページとなってしまいます。そこで、その見た目のデザインやレイアウトをコントロールするための言語として、このスタイルシートが用意されているのです。

***1 CSS**
CSSは「Cascading Style Sheets (カスケーディング・スタイル・シート)」が正式名称だが、日常的にはスタイルシートと呼ばれることが多い。

CSSで見た目をコントロールする利点

従来のように XHTML 文書中にタグや属性を使って直接装飾指示を行うやり方では、デザインの修正時には XHTML を 1 枚 1 枚開いて該当箇所を修正する手間がありました (01)。それが単独のページであればまだしも数百ページにわたる大規模なものとなると大変です。しかし、CSS を利用すればその状況は一変します。XHTML 内部にもスタイル指定



を書くことは可能ですが、それでは従来の方法と大差ありません。詳しいことは後述しますが、CSSは外部の別ファイルにまとめてスタイルを記述することができ、それをXHTML側から参照するという使い方が可能なのです。仮に大量のXHTMLに一部分の修正があったとしても、そのXHTMLが同じCSSファイルを参照していれば、そのファイルの該当するスタイルの修正だけですべてのXHTMLに変更が適用できるというわけです (02)。このようにXHTML文書から装飾に関するタグや属性を取り除いて、CSSにその装飾に関するすべてを任せることで生まれる利点もあるのです。

まずはCSSにできることを理解しよう

前述したようにCSSは、XHTML文書の見た目のコントロールを一手に引き受けることができるため、その適用範囲は多岐に渡ります。一例をあげると、文字色(前景色)や背景色の変更、フォントの指定、罫線の種類や太さ、ブロックの幅や高さといったサイズ指定やレイアウトに関わる部分など、Webページに含まれる要素に対してさまざまな表現が可能となります (03)。CSSの記述方法は、従来XHTMLで装飾目的に使っていたタグや属性の指定と大きくは変わりませんし、日常的に利用するCSSぐらいであれば習得にはさほど多くの時間はかからないでしょう。これからCSSを始めようという方は、まずCSSを使った装飾やレイアウトの基本を押さえましょう。CSSを使ったWebページデザインは決して難しいものではありません。基本ができてしまえば、あとはスタイルの組み合わせといった応用だけがすべてなのです。

